# NJ素流協News

平成26年２月28日
第110号

平成26年２月28日発行・発行所　ノースジャパン素材流通協同組合　〒020-0024 盛岡市菜園１丁目3-6（農林会館５階）
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / http://www.soryukyo.or.jp/index.html


## ノースジャパン素材流通協同組合「平成25年度林業研修会及び林業講演会」（続編）

1月31日岩手県滝沢市、岩手産業文化センター（アピオ）において、当ＮＪ素流協主催の「平成25年度林業研修会及び林業講演会」が開催された。前号に続き、中部森林管理局長　鈴木信哉氏の講演の内容をお伝えする。

**【林業講演会　第Ⅱ部】**

**「我が国における木材の流通と需給動向について」**

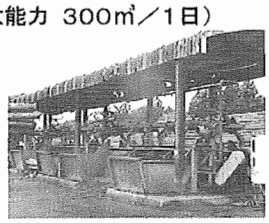
中部森林管理局長
鈴木　信哉氏

**▽土木資材用カラマツ杭材に高い評価（東信木材センター）**

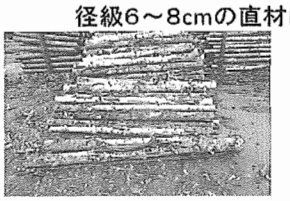
カラマツのふるさとといわれる長野県東部に、東信木材センターがある。貯木場は２１０００㎡しかなく、選別機も何十年も前に入れた古いものだが、昨年の取扱量は11万５千㎥、売り上げは11億５千万円に達した。

カラマツ原木は一般製材用のほか、合板・ＬＶＬ用材、集成材用ラミナ、土木用杭・矢板用材、チップ用材などを扱っているが、最大の特徴は、土木資材用材が取扱量の40％を占めることである。

自動選別機で仕分け（最大能力　300㎥／1日）



径級6～8cmの直材は、皮むき・先付け加工

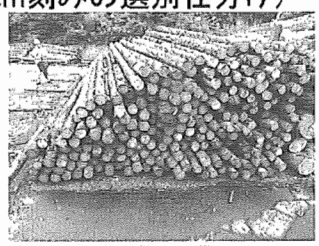


狭い土場で回転率を上げて売るには直接販売が良く、１００年を超えるような製材用材にはかなりの値段が出る。24時間受入れ可能で、自動選別機で区分し、バークは近隣のブルーベリー農家の肥料用等に有価で譲っている。

信州のカラマツ杭材は非常に評価が高い。径14cm以下は全て５cmから１cm刻みで揃えられ、真っ直ぐなものと曲がりのあるものに分け、ロットで販売される。

**一目選木**
**（末口径4～14cmは1cm刻みの選別仕分け）**

手前から径級12cm、13cm、14cmの椪
（カラマツ　長級4m）



径級9cmの椪
（カラマツ　長級4m）

主力商品はカラマツの土木用材で全取扱量の約４割を占める。
径級１４cm以下は、直材と曲り材に大別し１cm刻みで選別している。
細くなるほど値段が上がり、径級９cmで２万円／㎥。

土木資材業者の話では、「他の地域からも杭を仕入れるが、選別に時間がかかってしまう。１cm刻みならすぐ仕事にかかれる」という。この差のために、信州産の杭は同じ径級でも立方メートル当たり数千円高く取引きされる。また価格設定は立法メートル単価ではなく１本単価なので、細物ほど利幅が大きくなる。国有林材の採材も６cmからであり、特に10cm下に引き合いが多い。今は新植をしないので細い間伐材が出てこ

ない中、生長の遅い信州の山からは細い木が出てくるという強みがある。林業家で土木資材業を兼ねているようなところでは、長さ８ｍ、９ｍなど特注品も出している。

**▽売れない細物を高く売る法**

さらに価格が高いのは、全国的に手に入りにくい径３㎝などの造園用細丸太である。主な都市の造園工事における支柱の仕様を見ると、「長さ３ｍから６ｍ、末口径３㎝から７・５㎝」などとなっているが、そのような材はどこの市場に行っても売っていない。このような商品は単価が高く大変メリットがあるが、こうした資材を大都市の造園業界に納めているのは、ほとんどが竹問屋である。林業界が竹材業者と離れてしまい、造園業者が何を欲しがっているか、山からどんな材が出ているか、という情報のつなぎがなくなってしまった。庭園木一本一本に合わせた仕様など、山で伐っている人にしか対応しようのない市場である。山の経営をする中で、こうした需要があることを考えられるかどうかが、一つのポイントといえる。

その他の土木資材の用途として、弱い地盤に杭丸太を打ち込んで固める軟弱地盤改良工事がある。東京駅地下には、膨大な量の岩手県久慈産のアカマツ丸太が埋まっている。霞ヶ関などでは米マツを使用しているところもある。今後も軟弱地盤対策工事は続くと考えられ、径12㎝、13㎝など、最も売れない丸太の需要先として期待できるのではないか。

**▽広葉樹用材の可能性**

最近の丸太動向での大きな出来事に、ロシアの輸出関税問題がある。ロシアが丸太の輸出関税を引上げると宣言し、ロシア材取引が激減した。実際には針葉樹材では引上げは実施されなかったが、ロシア材離れが起こり、合板向けの国産材需要が高まった。一方、広葉樹の関税が一律に引上げられ、円安のためにアメリカからの代替材も入らず、この時から日本国内で広葉樹の丸太不足が起こった。

丸太の採材寸法は、その最終用途から決められるものであり、日本の住宅の１間を基本としてメートル換算される。広葉樹の採材は、住宅の化粧用単板の寸法が基準になっている。構造材となる針葉樹とは違い、横づかいの尺モジュールが基本となるため、１・８ｍ、２・１ｍ、２・４ｍ…などとなっている。今後は広葉樹を何でも２・１ｍに採材してその中から良い物を用材に回すという発想ではなく、広葉樹が一体何に使われているかを考える必要がある。

大手建材メーカーは高級内装材を国産に切り替えつつあり、トチノキ、ホオノキ、クリ、サクラなどは、径20㎝あれば必ず売れる。クリの４ｍ、６ｍ材は土台用にロットで販売できるし、クリのフローリング用材は、短尺物でも高級材として扱われる。トチノキは白いので好まれ、洋風の内装造作用に高く売れる。広葉樹ではないが、特殊用材では、ネズコは網天井や和下駄用の最高級品として高く取引きされる。飛騨地方ではヒメコマツ文化があり、人気がある。このように、地元で知らない木があったら、他の地域でどのような用途があるか見て欲しい。

**▽自分の山の価値を見直す**

長野県内での木材利用の例として、北陸新幹線開業に合わせた駅改修工事では、長野駅舎に地元産カラマツの大庇（ひさし）を取り入れたり、工事用板囲いにも鉄板ではなく木材を使用している。工事現場のプレハブ事務所や工事看板を地元材を用いた木製にするなど、公共工事のお金をできるだけ地元に落ちるようにしている。

近年需要の伸びている薪では、名古屋最大の木材市場が薪販売を行っており、昨年の売上が９千万円に達した。また薪の宅配で有名になった会社は、針葉樹薪のみで売上を伸ばしている。

例えばカラマツであっても、今どういう需要があるかによって、供給の中身を大きく変えていかなければならない。工場需要よりも、最終需要を知ること。世界的な価格の流れなどは知っていても、身近なことについては知らないこともある。自分の山の価値を見直すことが、今必要である。（おわり）

長野駅前広場完成予想図－木製の大庇と列柱がシンボル

# トピックス

## ＮＪ素流協「岩手県北、青森県、秋田県大館地区在住組合員等会議」を開催

２月６日、岩手県二戸市の二戸勤労者総合福祉センター（ワークインにのへ）において、岩手県北、青森県、秋田県大館地区在住組合員等会議が開催された。これは昨年12月末に、廃棄物リサイクル処理業㈱フジコーと電力需給管理事業の㈱エナリスが、岩手県一戸町の一戸インター工業団地内において森林未利用材等を燃料とする木質バイオマス発電事業に着手し、ＮＪ素流協が燃料用木材の供給に協力すると発表したことを受けたもの。この日は当該地域の組合員と、事務局員、所管の県広域振興局職員ら約40名が出席した。

当発電所の発電規模は６２５０kW／時で、燃料消費量は年間９万トン、平成28年２月に操業開始予定である。これについて、はじめに事務局が発表までの経緯と事業の進捗状況を説明し、「今後は発電事業者の子会社一戸森林資源や一戸町とともに木質バイオマス需給協議会を立ち上げ、燃料用原木の価格設定等、具体的な事項を詰めていく。検討に当たっては組合員各位のご意見を勘案する」と説明した。出席者からは、原木の価格設定の基準や、燃料として受け入れる原木の樹種や含水率等についての質問が出された。

このほかの議題として、最近の原木需給動向、労働安全衛生規則改正による林業用機械の安全基準と特別教育が取り上げられ、事務局より説明が行われた。

## 「国有林材供給調整検討委員会」に出席

２月４日、東京都千代田区の林野庁会議室において、平成25年度中央国有林材供給調整検討委員会が開催された。これは、国有林を管轄する森林管理局の管轄区域を越えた広域的な供給ニーズに的確に対応するため、学識経験者や川上から川下までの林業・木材産業関係者から知見・意見を聴取するものである。今年度新たに設置され、年に１回開催される。当ＮＪ素流協から高橋常務理事が委員として出席した。

委員会での検討の結果、現時点では局の管轄地域を越えた緊急の供給調整を行うまでの必要性はないが、国有林の多い地域からの供給を望む意見を踏まえ、システム販売の取組を一層拡大し安定的な取引を推進することが重要である、との見解が示された。

また２月27日には、秋田市の東北森林管理局において、平成25年度第３回東北森林管理局国有林材供給調整検討委員会が開催され、同じく高橋常務理事が委員として出席した。これは、東北森林管理局内での国有林材の供給調整の必要性等を検討するもので、四半期に１回開催されている。

委員会での検討の結果、量的な供給調整を行う必要はないものの、今後の需給状況を注視しながら、一般材比率の向上・スギ合板用素材の販路拡大を検討することとされた。

**主な意見**

・１月中旬頃から森林組合・林業事業体の生産量が増えてきたが、絶対量は足りていない。原木在庫量はほとんどない。

・製材品の出荷量は前年比15％増加した。製品在庫はほとんどなく、この状況は続くものと思われる。

・三陸道や沿岸の高台移転の宅地造成作業に伐採の作業班が派遣されており、内陸における素材生産作業員の人手が不足している。

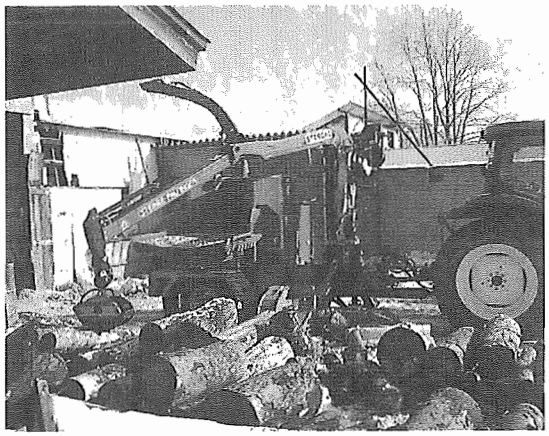
・災害公営住宅に必要な管柱の確保に目処が全く立たない。高台移転の伐採箇所では３ｍの丸太採材がなされておらず、簡単だからと合板用に切ってしまう。製材用は曲がりやトビクサレに厳しく、価格差がつかないと製材用の採材は難しい。

## 「木質バイオマスエネルギー利用促進セミナー」開催される

２月７日、紫波町において、岩手県林業振興課、北上川上流流域森林・林業活性化

センターの主催により、木質バイオマスエネルギー利用促進セミナー・現地見学会が開催された。セミナーはオガールプラザにおいて行われ、㈱ＦＴカーボン代表取締役富士昌孝氏と紫波町産業部部長小田島栄太郎氏による講演が行われたほか、岩手大学名誉教授沢辺攻氏がコーディネーターとなり、「適切な熱需要の把握と燃焼機器の選定について」をテーマにディスカッションが行われた。

現地見学会は岩手中央森林組合紫波チップ工場において行われ、紫波町が導入したオーストリア製移動式チッパー「ＳＴＡＲＣＨＬ　ＭＫ－50Ｓ」の試験運転を見学した。



これは、資源循環型のまちづくりを進めている紫波町が、町内で被害が広がっている松くい虫の被害木等を有効活用するため、今年度導入したものである。チップ製造事業は一般社団法人紫波町農林公社に委託し、チップは27年完成予定のエネルギーステーションや、ラ・フランス温泉館等の施設において燃料として利用される予定である。将来的には年間約１３００ｔの供給が見込まれている。

## 映画「ＷＯＯＤ ＪＯＢ！（ウッジョブ！）～神去なあなあ日常～」公開

林業を題材とした話題の映画、「ＷＯＯＤ ＪＯＢ！（ウッジョブ！）～神去なあなあ日常～」がまもなく公開される。

「ウォーターボーイズ」などのヒットで知られる矢口史晴監督が、「舟を編む」で本屋大賞を受賞したベストセラー作家・三浦しをんの原作を映画化、脚本も手がけた。

主人公の青年・勇気（染谷将太）がひょんなことから林業の現場に足を踏み入れ、ワイルドすぎる先輩（伊藤英明）達に囲まれて成長する姿が、憧れの女性（長澤まさみ）とのエピソードを交え描かれる。三重県の山林で行われたロケでは、役者自らチェンソーを扱い伐倒などのシーンが撮影された。

笑いあり、感動ありの「青春林業エンタテインメント」は5月10日、全国東宝系劇場にて公開。

視察報告

# イタリア北部・木質バイオマス事業を視察して（その２）

ＮＪ素流協　営業企画部長兼管理部長
小野寺　義晃

**【薪生産工場・酒蒸留所】**

視察３日目は、まずカペラ・マジョーレにある「デ・ルカ・エリオ社」の薪生産工場を見学しました。

創業者エリオ社長の家族企業で従業員13名。業務は原木の伐採から、薪割、顧客への配送までを一貫して行っており、原木はブナを主として20㎞圏内の現場から調達し、用途によって様々な規格で製造しておりました。

**〈薪の長さ〉**

・一般ストーブ用　…20～25㎝
・業務用ボイラー用…30～35㎝
・暖炉・オーブン用…45～50㎝

販売価格は、配送距離に応じたエリア単価が設定され、専用コンテナで配送されていました。（写真１）

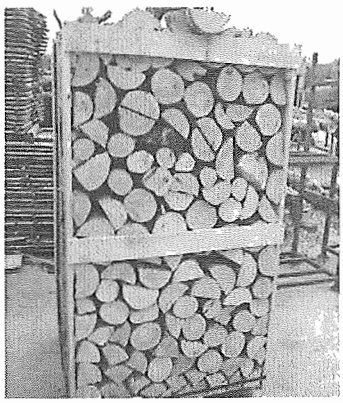


写真１　薪配送用コンテナ

この薪工場が保有している珍しいトラックがありましたので紹介します。一見、普通のグラップル車に見えますが荷台ごと取り外しが可能で原木を運ぶ時はグラップル車、チップ原料を運ぶ時は箱型チップ車になる一台で二役のトラックでした。（写真２～４）

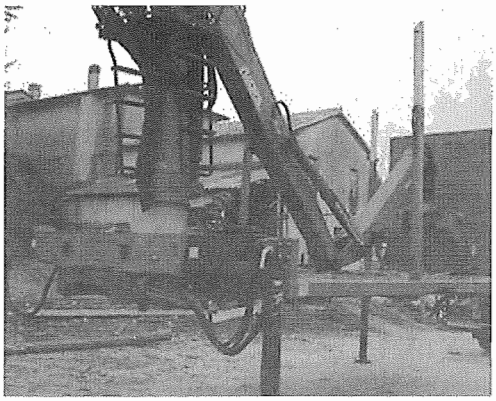


写真２　グラップル部

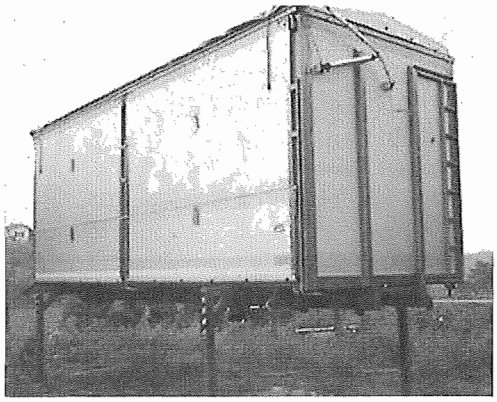


写真３　コンテナ部

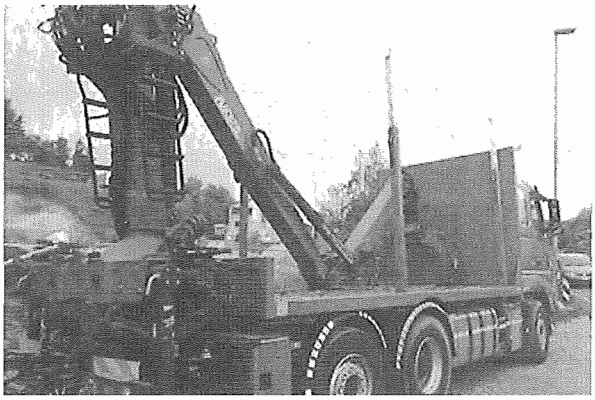


写真４　グラップル装着時

ヤドカリのように後ろを交換するグラップル付きトラックは日本にはありませんから珍しかったです。

次いで「アンドレア・ダ・ポンテ蒸留所（グラッパ製造）」のバイオマスボイラー使用の工場を見学しました。（写真５）

グラッパとはワイン製造に使われた葡萄の搾りカスを発酵させて蒸留した香り豊かなお酒です。

この工場では１９８３年にバイオマスボイラーを、２００９年に１１０kWの太陽光発電を設備し、年間70ｔのＣＯ２排出削減に成功しているそうです。

発酵後の搾りカスは乾燥され、比重によりカスと種に分類され、カスは飼料として活用され、種からは油を取っています。また、バイオマスの灰は肥料に使われ、すべて無駄なくリサイクルされていることに感心しました。なお、写真撮影禁止のため、工場内部は紹介できませんが強烈な匂いであったことが印象に残っています。

写真５　アンドレア・ダ・ポンテ蒸留所

**【ペレット工場】**

最終日の視察は「ラ・ティエッセ社」のペレット工場を見学しました。この工場は、イタリアで使用されているペレットの約15％のシェアを製造している大型の工場でした。

この工場は、年間６万ｔを製造するとともに４万ｔを輸入して計10万ｔを販売しています。販売先は99％が家庭用となっており、ペレットの製造原料は、近隣の製材工場より背板等廃材が１日に平均15台ほど運び込まれ、24時間稼働で製造されていました。ペレットは季節的（冬場）消費となることから、その需要の片寄りを調整するため、夏場は値引き販売するなどの対策がとられていることも教えてくれました。

この工場での販売量の多さから、イタリアのペレットストーブの普及率が高いことを改めて認識させられましたが、イタリアではバイオマス暖房施設の導入に優遇措置があるため、一般家庭での木質バイオマスの需要は今後も更に伸びると予測されております。

**【終わりに】**

今回の視察でイタリアでの木質バイオマスの利用の様子を直接見て、色々学ぶことが出来、出発前に想像していたイタリアのイメージが大きく変わりました。イタリアと比較して豊富な森林資源を保有する日本は、まだまだ林業および木質バイオマス産業の成長の可能性があると感じました。

私は現在原木の流通に関わっておりますが、地域林業の発展に少しでも貢献できるよう仕事に取り組んで行きたい、と今回の研修を終えて強く感じた次第です。

## 平成26年２月分の販売実績

1　合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約760㎥増加、カラマツが約480㎥増加、アカマツが約810㎥増加し、全体では約2,050㎥増加している。昨年同月と比較すると、スギが約4,120㎥増加、カラマツが約2,670㎥減少、アカマツが約310㎥減少し、全体では約1,140㎥増加している。今月のシステム販売取扱量は約190㎥であった。

2　その他（合板用以外）の出荷量は前月より約400㎥増加、昨年同月より約280㎥減少している。

3　今年度の年間計画量258,000㎥に対する出荷量の割合（目標達成率）を92％とすると、今年度の全体出荷実績は、計画数量を10.5ポイント下回る結果となった。

（㎥）

| 樹種 | 長級（m） | 当月出荷量 合板用 | 当月出荷量 その他製材用等 | 当月出荷量 計 | 今年度累計 合板用 | 今年度累計 樹種別割合（%） | 今年度累計 その他製材用等 | 今年度累計 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| スギ | 2.0 | 4,413 | | | 45,441 | | | |
| | 4.0 | 3,672 | | | 28,734 | | | |
| | 計 | 8,085 | 3,721 | 11,806 | (2,655) 74,176 | 47.1 | 33,240 | (2,655) 107,416 |
| カラマツ | 2.0 | 2,461 | | | 35,067 | | | |
| | 4.0 | 245 | | | 11,699 | | | |
| | 計 | 2,706 | 1,302 | 4,008 | (1,151) 46,765 | 29.7 | 9,055 | (1,151) 55,820 |
| アカマツ | 2.0 | 2,357 | | | 23,467 | | | |
| | 4.0 | 1,086 | | | 7,140 | | | |
| | 計 | (191) 3,443 | 151 | (191) 3,594 | (318) 30,607 | 19.4 | 3,865 | (318) 34,472 |
| その他針葉樹 | | 1,178 | 258 | 1,435 | 5,755 | 3.7 | 5,615 | 11,371 |
| 広葉樹 | | | 13 | 13 | 117 | 0.1 | 419 | 536 |
| 合計 | | (191) 15,412 | 5,445 | (191) 20,856 | (4,124) 157,420 | 100.0 | 52,194 | (4,124) 209,615 |
| 目標達成率（%） | | | | | | | | 81.2 |
| 計画量 | | | | | | | | 258,000 |

（　）はシステム販売取扱量（内数）

## 落穂拾い

東日本大震災が発生してから、間もなく満３年を迎える。本日（平成26年２月28日）付の地元紙に「山田町・ＮＰＯ横領事件」について載っていた。北海道・旭川市のＮＰＯ法人「大雪りばぁねっと」が山田町から震災被災者向け緊急雇用創出事業を受託し、これに関わる補助金を横領したという事件である。容疑者たちを送検したという記事であった。未曾有の大災害を蒙ってその事後処理や災害復旧・復興事業に地元自治体も住民も日夜の別なく奮闘しているのを横目に見ながら、せせら笑ったように詐欺的行為を行うなどということは、私に言わせれば、「極悪非道の奴ばらめ、許し難い！」のである。

これまでも我が国において、ＮＰＯ（民間非営利団体）やＮＧＯ（非政府組織の民間援助団体）と呼ばれる組織の活動が注目を集めてきたし、またその活動の成果に大きなものもあった。ＮＰＯとＮＧＯはその活動趣旨から基本的には同じような団体・組織といっていいが、ＮＰＯの方は活動の場を主に国内に置き、地域の社会福祉活動や環境保護運動などを行い、ＮＧＯは主として開発途上国等の外国において各種の援助活動を行う団体を指すようである。でも、ＮＰＯ、ＮＧＯの名称を知っていてもその団体がどのような性格の団体で、どのような資格で、どのような事業を展開しているかを詳しく知る人は意外に少ないのである。ここで思い出すのは、小説家・曽野綾子さんがある雑誌に「ＮＧＯ40周年の節目に」という表題の文章を書いている。少し抜書きしてみよう。

「今からちょうど40年前、私は海外で働く日本人の神父や修道女の活躍を助けるための小さなＮＧＯをはじめた。当時はただ韓国の元ハンセン病患者たちが集まって住む村に医師を送る仕事だけをやっていた。…。ある日、聖ラザル村という元患者村の村長の李庚宰（イギョンジェ）神父が私の家にやってこられて、聖ラザロ村に食堂を造ってほしいといわれた。その際、『曽野さん、こういう仕事は決して一人の人から出してもらわないようにしてください。人を助けるというような貴重な機会は、出来るだけ多くの人に分け与えてください』と言ったのである。私はその一言で李神父の心の弟子になり、それから40年を途上国のために働くようになった。…。数千人の日本人の善意の人々の深い惻隠（そくいん）の情に支えられ、この仕事は思いがけず40年間も続いたのだが、私たちは最初から２０１２年をもって若い世代に仕事を委譲する計画を立てていた。第一世代として働いた４人が、皆80歳を超えたからである。…。

しかし４人ともそろって元気なので、今までの路線は若い世代に託して、われわれだけでゼロから一つのプロジェクトのため働くことにした。それは、整形外科医たちがマダガスカルの貧しい家庭に放置されている口唇口蓋裂の子供たちに、無料で手術をする『昭和大学マダガスカルプロジェクト』を、笹川記念保健協力財団と協働して続けることにしたのである。昨年はすでに31人もの子供たちが手術に成功した。」

引用が長くなったが、曽野さんは最後に、「今私には一つの感慨しかない。老人世代も時にはまだ使い道があるということだ」と締めている。